

中世ヨーロッパ史とグローバルヒストリー

— 諸々の経験と展望

ミヒヤエル・ボルゴルテ

井上周平訳

皆様、今年三月初頭に、今晚みなさんの前で新しいヨーロッパ史の展望についてお話しするよう要請されたのは、少しおどろきでした。というのも、私はすでに二〇〇二年と二〇〇六年に中世ヨーロッパについて比較史の観点から著作を二点上梓しており、それに続いて二〇一一年までベルント・シュナイトミュラー (Bendt Schneidermüller) とともに中世ヨーロッパ史における文化の絡み合いについての大きなプロジェクトを率いてきたからです。もちろんそれで全てのことか語られたわけではありませんが、これまでの諸々のアプローチが正しかったのかどうかという抑え

きれない迷いは、私をさらなる新しい挑戦へと駆り立てました。かくして私は世界史へと方向を転じました。これはドイツでは近代史家によってグローバルヒストリーとして試みられていたものです。ヨーロッパ研究評議会による多大なる支援のお陰で、私は二〇一二年以来、この魅力的な新しいプロジェクトに没頭することができています。ドイツとアメリカのグローバルヒストリーについて幾つか論文をものした後、目下、寄進の世界史について書いており、うまくいけば、その後で出版社の強い営業に膝を屈して、中世のグローバルヒストリーを書きたいと考えています。

です。ので、ヨーロッパ史の新しい見通しを説得力をもって示すことができるのかどうかについては迷いがありましたが、それでも敢えて、私の経験と将来における中世史の叙述に対する私の期待をここで述べようと思いました。今回与えられたテーマから、残念ながら私は、一般に適切だとされるよりもはるかに多く、自分自身と自分の仕事についてお話しすることになります。一時間弱の間、おつきあいいただければと思います。

ヨーロッパの歴史というものは、ヨーロッパという問題の地平においてのみ書くことができます。もちろん、我々や我々と同時代を生きる人々の中には、ヨーロッパというものがあるのかについて知っていると思っている人もいます。しかし、このヨーロッパとは何なのかという問題について、知識人や歴史家のあいだで一致した見解があるとは言えません。それだけになおさらはつきりと意識されるのは、ヨーロッパ史というものがつねに、とりわけ主観的なひとつの構築物でしかないかもしれないということです。したがって、複数のヨーロッパ史というものが我々の読者や聴衆に供され得るのですし、またそうされなければならぬのです。その際、ヨーロッパの歴史が学術的な水準を満

たして書かれるべきであれば、異論の余地のない前提がひとつあります。それは、このヨーロッパ史なるものは、意図的にイデオロギーに奉仕するものであってはならないということです。もちろんこの歴史の書き手たちは、歴史に答えを求めようとする同時代の人々の問いに耳を傾けるべきでしょう。しかし、古い偏見を追認するような陳腐な答えは避けなければなりません。この意味において、ウィーソンのある社会経済史家が二〇〇三年に試みたことは、知的に満足いくものではなく、学術的には議論の余地のあるものでした。彼は、マックス・ヴェーバー (Max Weber) によるヨーロッパ特有の道という古いテーゼを、中世史研究の成果によって裏付けようとしたのです。よく知られているように、マックス・ヴェーバーは、一九二〇・二一年に次のような問いを立てました。普遍的な意義と通用性を獲得した文化事象が西洋の地において発展したということは、どのように説明されるべきなのか、と。けれども、ヴェーバーが取り上げているのは、我々がこの件に関して歴史から作り上げた「イメージ」であるのに対して、件のエピソードは自らの所見を事実として考え、それがただより具体的に説明される必要がただだとしたのです。おまけに彼は、ヨーロッパ大陸西部の、革新の喜びに満ちあふれた「中核のヨーロッパ」と、抑制されたヨーロッパ周辺地域

のあいだに序列をつけているのですが、その際、自分がそれによって現代の政治の諸々の可能性にどの程度奉仕したのか、そして反対に、歴史と現代における文化の多様性という新しい認識を正しく評価したのかどうかをよく考えてはいません。いずれにしても、ヨーロッパについて本質主義者のような発言は避けられねばなりません。歴史家として我々が言えるのは、ヨーロッパというものがそれぞれの問題設定のもとでどのように立ち現れるのかということだけであり、それが「実際に」何だったのかということではないのです。

方法論について考える際には、我々が慣れ親しんでいる歴史の見方は特殊な事情に引きつけられているのだという見解からスタートするのが最も良いでしょう。我々は、ある都市や地方や国の人々の歴史であれ、教会や学問や農業の歴史であれ、とりわけ過去の個々の特殊事象を研究します。個別事象の研究というこの関心の偏りは、歴史を考える際に典型的に見られるものかもしれませんが、ドイツでは歴史主義の伝統によってその偏りはより強いものになっているかもしれません。ヨーロッパの歴史に先入観なく取り組んでいる人は、この関心の偏りは当然のことだと思ってしまうでしょう。というのも、多種多様な文化事象のすべてを見渡すことはできないからです。しかし、そうした関心の偏

りから、どのようにヨーロッパを歴史的にひとまとまりのものとして把握することができるのでしょうか。多様性のなかの一体性というよく使われる思考の図式を使ってその把握を試みる人は——もし十分に自省的であれば——その途中で極めて多くの逸脱するものや統合できないものが残ることに、すぐに気がつくでしょう。多種多様な事象はまた、ヨーロッパの歴史に特定の起源や目的地があるという前提のもとにまとめたり、整理したりすることはできません。今日、歴史家や評論家は、ヨーロッパ統合のプロセスがどうやら留まるところを知らずに進んでいること、そしてその進行が共通の伝統やヨーロッパ神話の主導するものではないことにすでに驚いています。多くの政治家や評論家、そして歴史家さえも、ヨーロッパの人々は皆、ある共通の価値体系——たとえば自由と民主主義と人権の価値体系——の影響を受けていると主張していますが、この主張はおそらく実証研究に耐え得るものではありません。現代において、ヨーロッパの歴史は劇的に変化しているように見えます。その際、一般的に認知された起源の物語やあるいは単に知られているだけの起源の物語が語られることがないばかりでなく、将来の理想的な社会像が語られることもあります。この経験は歴史家の意に沿うものです。というのも、歴史家は、将来の歴史を予言することはできな

いと知っているのですから。したがって、ヨーロッパの歴史はまた、その行き着くところもまた未定のままに書かれなければなりません。もし、ヨーロッパについてその過去から特定の目的地を引き出すとするならば、特定の経験を優先し、他の経験を犠牲にしてしまうことを避けられないでしよう。

しかし、もしヨーロッパの歴史を描くのに確固とした目的地がないのであれば、歴史はまとまりなく散り散りとなり、それぞれが独立した事例からなる混沌へと霧散してしまふのではないか。そう考える人もいるかもしれませんが。そうなると、歴史というものは、ドイツの偉大な中世史家アルノー・ボルスト (Arno Borst) がすでに注意を喚起しているように、支離滅裂なものになってしまふでしょう。多種多様な事象から叙述することのできるひとつのまとまりを作り上げることが、学術としての歴史の担う課題であることに疑いはありません。しかしそれは、そのまとまりに還元できない特殊事例から居場所を奪うことなしに行わなければなりません。重要なのは、歴史の多様性と一体性のあいだで適切なバランスを作り出すことです。このことはただ、ヨーロッパを一貫した比較の観点から、共通点と相異点のそれぞれに等しく関心を払って見るることによつてのみ、方法的に可能になります。ヨーロッパの歴史を描

くこととヨーロッパの歴史を研究することは、その目的から、この比較することにまさに左右されるのです。^⑩

もちろん、比較が研究や叙述の方法論の全体にどのよう適合されるべきなのか、そして比較はとりわけどの目的のために用いられるべきなのかを決める必要はあります。一九二七年のオスロにおける国際歴史家会議でマルク・ブロック (Marc Bloch) が「ヨーロッパ社会の比較史」を提唱した講演はよく知られるところとなっておりますが、ここでブロックは、比較というものが他との関係史的な分析によつてつねに補完されねばならないことを主張しています。^⑪ ブロック自身は、対象と同時代の隣接社会との比較という型に専念しました。ここでは、隣接するそれぞれの社会が間断なく相互に影響し合い、同一の——その少なくとも一部は共通の起源を求めることができる——主要原因に左右されることが想定され得るといいます。かくしてブロックは、主著のひとつにおいて、西欧・中欧の封建制を他の中世社会と比較しました。ヨーロッパの西についてはケルト社会、北についてはスカンディナヴィア、東と南についてはスラヴとイスラーム社会およびビザンツ社会とです。^⑫ この比較を用いて、ブロックはまた、ヨーロッパの封建社会の内部についても、国ごとだけでなく、地域ごとの相異をも浮き彫りにしました。ここでヨーロッパというも

のは、封建的紐帯のメカニズムが及ぶ範囲として把握されているのです。しかしながら、現在と将来のヨーロッパ史叙述は、ブロックにそのまま連なることはできません。ヨーロッパの封建社会というブロックの概念は、西洋ヨーロッパが世界的な文化を作り上げたとする観点に基づいたものなのです。比較の対象とされた他の社会は、その際、背景や脇に留め置かれています。今日そのように歴史を見る眼を受け継ぐのは、「西洋文明」というテーゼを支持し、現代のヨーロッパで生じているプロセスは東欧が西欧化し、イスラーム社会が啓蒙化と近代化によってキリスト教的な西洋に適合しさえすればうまくいくと考える人くらいでしょう。現代のヨーロッパの状況からこうした期待が正當なものではないと考え、克服しがたいヨーロッパの現実を文化の多様性のなかで見える人は、別の道を探さねばなりません。

その際まず、共通の起源を辿ることのできる隣接社会・隣接現象だけが比較観察され得るという方法論上の限定が脇に追いやられることとなります。まさに離れた地域の比較において、まったく違うものに同時性があり、さらに独自の歴史的因果関係のなかに組み入れられていることが明らかになるのです。次に、バラバラに見えるものが最終的には一本の線を辿ることになるような直線的な発展とい

うイメージは、多中心型のネットワークという認識にとつてかわられることとなります。そのネットワークのなかでは、行為者が、それぞれの行為の予測できない作用によって結節点を形成します。

このように、歴史の比較というものは、ヨーロッパをひとつのまとまりとして構築するのではなく、諸々の現象を孤立から解放し、限定的な範囲を持つ複数のまとまりや多様な階層に結びつけるのに用いられるべきです。こうした認識に立って歴史を書くという試みを、私は二〇〇二年にヨーロッパ中世盛期（一〇五〇年〜一二五〇年）について^①の著作によって世に問いました。同書は、ドイツの「ヨーロッパ史ハンドブック」叢書の第三巻として刊行されたため、出版社と総監修者のある種の想定に沿う必要がありました。同書の第一部では個々の国と民族の歴史を語り、次に第二部で文化や経済、社会についてヨーロッパを横断するかたちでの分析が計画されていました。そして第三部では、研究上の諸々の問題についての議論が行われることになっていました。以下では、この第一部に関するコメントに限定して、場合によっては引用を交えつつ話を進めましょう。

同叢書の他の著者たちが^②国民国家の歴史の伝統のなかで行ったような、国ごとの記述をたんに並べただけの構成は

考えられませんでした。私はむしろ、それぞれの章で、歴史上のまとまりを少なくとも二つ比較して検討し、描こうと考えました。ローマ教会に関してだけはこの原則を守ることができていませんが、その代わり、ヨーロッパのほぼ全域に関しては、王朝の歴史という私が選んだモチーフが当てはまりました。私は中世ヨーロッパの二つの帝国の歴史から話を始め、それを「引き延ばされた没落のなかの二つの帝国」という章題で描写しようとした（訳注：古代ローマ帝国の没落が、中世の二つの帝国という形で「延期」されたことが意図されている）。もちろん、私はここで、他の章におけるのと同様に、ヨーロッパ全域に関して帝国なるものとそれぞれの国の関係を顧慮しておかねばなりません。冒頭ですでに、中世世界が近代の国別の歴史とは矛盾することをはっきりと示すことになるテーゼが提示されています。「中世盛期のヨーロッパの政治史は、個々の王国よりも、二つの帝国——西のローマ・ドイツ帝国と東のビザンツ帝国——によって規定されていた。この二つの帝国は——それぞれ異なったやり方で——古代のローマ帝国に連なるものであり、それぞれどこかそれを継続するものであったとはいえ、独自の中世的な特徴を示していた。さらに、この二つの帝国は、皇帝思想の伝統を近代へと仲介したのであり、その伝統は二〇世紀

に至るまで生き続けたのである^⑤。また導入として、この二つの帝国のそれぞれの近隣社会への相互関係が、両者を比較しつつ概観されています。「二つの帝国の『ヨーロッパ』への帰属の程度は、それぞれに異なっていた。ビザンツは、古代の伝統のなかで、世界支配のイデオロギーを持った地中海帝国にとどまった。その首都であるコンスタンティノープルは、ヨーロッパをアジアから地理的に隔てるボスボラス海峡沿岸に位置していたが、その支配領域はそこから小アジアだけでなくカフカス山脈の南のアルメニアにまで及んでいた。首都コンスタンティノープルは、ヨーロッパからアジアまで延びる「さまざまな街道の出発地点であり、目的地点であった」。「ビザンツ帝国の外交政策は、ヨーロッパが関係する限りにおいてかなりの程度までテュルク系諸民族に集中していた。とりわけ、スラヴやブルガル、ハンガリー、ペチェネグ、クマンらに対する帝国北側の境界の保全を重視していた（…）。ヨーロッパを総体として政治的に形成することにビザンツは関心を抱かなかつたし、そのためのあらゆる可能性に欠けていた。とはいえ、ビザンツは一一五〇年頃にはヨーロッパの同盟システムの形成に参加している。これに対して、西の帝国はヨーロッパの中央に位置していた。この帝国はローマと地中海イタリア地域も支配領域に含んでいたが、その重心はアルプス

以北のドイツにあった。そしてそこから、ドイツ王でもあるローマ皇帝は近隣諸国すべてに影響力を及ぼしていた。東のビザンツ帝国のように、この西の帝国も独自の政治・文化・教会システムを中心にいたのである。とはいえ、時の経過とともに、とりわけ西欧の諸王朝に比べて、その主導的な地位は失われていく。しかしビザンツの場合とは異なり、その領土の保全は一度も重大な問題とはならなかった¹⁸⁾。

「歩調の異なる台頭のなかの二つの王国」と題された、イングランドとフランスの歴史を比較した次の章は、おそらくどちらかといえば伝統的な期待に応えるものになりました¹⁹⁾。ケルトの地であるウェールズやアイルランド、スコットランドは、マルク・ブロックの原則に従って描かれました。しかし、どちらかといえばまとまりを指向するブロックの意図を、私は反転させました。「共通の歴史的出発点を持つ隣接諸国・地域は、比較考察にとつて、歴史の展開の変わりやすさについて認識するための特別な機会を提供してくれる。この諸々の前提はブリテン諸島において与えられている。それらは地理的に互いにまとまりのあるものと見なされているばかりか、ともに海によって大陸から隔てられている。そして、イングランドとアイルランドのどちらにもケルトが入植していた。ケルトの民族的・文化的

均一性を過大評価してはならないが、しかし、ケルトの遺産がその後さまざまな規模の侵入を数多く受けた後でも引き続き影響力を持ったということは、中世におけるこの島々の歴史を特徴づけるものである。これらの侵入は、肯定的に見るならば、ブリテン諸島においてははっきりと境界線を引くことのできる政治システムをそれぞれ持った四つの民族の形成を促したのである²⁰⁾。

離れた地域を比較するという発想は、スペインとスカンディナヴィアについての章においてははっきりと示されることになりました。「スペイン、つまりイベリア半島と、スカンディナヴィアは、ヨーロッパという胴体の四肢を形成している。ヨーロッパ大陸と地続きであるにもかかわらず、ふたつの地域は独自の文化世界を示しており、——それぞれの先史時代の影響から——中世盛期の他のヨーロッパ地域と同じようになるのは、ごくゆっくりとでしかなかった。もちろん、歴史の力によってスペイン人たちには自分たち自身のこと集中しなければならぬ状況が繰り返し生じた一方で、スカンディナヴィアの人々にとつては、未来はまだ定まつておらず、自由に変えられるように見えたであろう。これはヨーロッパの他の地域の民には考えられないことだった。この二つの広大な地域のあいだを行き来するには長い時間がかかり、船乗りか巡礼者が時折行っただけ

あった。そのため、ここで南北の相互作用について何かを述べることはほとんどできないし、どちらの地域も共通して第三者に依存して、ヨーロッパの関係性のネットワークに組み入れられていたのである。このように、中世盛期のヨーロッパ史という地平においてスペインとスカンディナヴィアを比較することは、相互のズレを補正しやす近隣諸地域について叙述するよりも、その特殊性だけでなく、非共時的なものの同時性をはっきりと示すことができるのである。ヨーロッパに対する外部からの脅威は、キエフ・ロシアに対する遊牧民や、スペインに対するアフリカからのイスラームの侵攻と比較する観点から扱われました。

王朝を叙述の根底におくことの制約は、二つの比較において、読者と私自身にはつきり示されました。バルト三国からアドリア海までの中東欧とシチリア島は、私には「君主支配の実験場」であると思われる一方で、アイスランドとイタリアのムーネの歴史には共和政の思想と行動の痕跡を辿ることができました。とりわけ、制度史的に正当化された私の試みは、南欧のムーネや海洋共和国を、北欧の「共和国」や島の族長支配と比較しようとするもので、知的に大きな喜びでありましたが、私の同僚の多くを困惑させ、激高させさえしました。

二〇〇二年に上梓した私の歴史叙述において重大な前

提となっていたのは——その後も変わっていませんが——ヨーロッパの境界線を外部に対してどのように引くのかということについての私なりの解釈でした。中世において「ヨーロッパとは何か」について討議されるということは一度もなく、そのヨーロッパという名称は、ベルント・シュナイトミュラーが言うところの「喚び起こし概念」(訳注・ひとつの呼称が、社会的・政治的な意図や圧力に応じて、その都度その内容が更新され利用されるもの)として、ほとんど吟味されることなく用いられていました。そのため、歴史家はヨーロッパというものを自分にとって都合の良いように自由に語ることができません。もちろん、その際に歴史家は恣意的なやり方をしたり、ある種の伝統をまったく無視したりすることはできません。たとえばインドやサハラ以南のアフリカをヨーロッパの一部と呼ぶとすれば、それは混乱を招くだけで、ほとんど有益ではないでしょう。詳細部分は、我々の歴史叙述家としての役割からもたらされます。我々はつねに同時代の人々に対して歴史を書いているのですから、対象を扱う際にも、過去の分析と叙述を媒介とした現在についての知見を求める同時代の人々の期待に沿わなければなりません。したがって私が意図したのは、今日ヨーロッパ人を自認し、ヨーロッパに帰属したいと考える全ての人々のために歴史を書くということ

した。その際、周知の通り、ヨーロッパの東側をどこで区切るのかという点についてだけは困難が生じた。というのも、どこにロシア人やトルコ人が自らを位置づけるのか、あるいはまた、彼らがその西側の近隣諸地域の人々からヨーロッパ人と思われているのかどうかということには、周知の通り議論があるからです。歴史家はこの問題を解決することはできません。それは現在と将来の政治家の課題です。しかし、この二つの国と人々のどちらをも、中世ヨーロッパ史の叙述から原則的に、そしてどの観点においても排除するとすれば、それはまったくの誤りであろうことは疑いを得ません。というのも、彼らはヨーロッパの他の地域と非常に密接に結びついてきたからです。ここで歴史家としてまったく反対の姿勢をとり、ヨーロッパを西洋と同一視しようとする人は、自分がそれによってイデオロギー的な独占化の危険に陥らざるを得ないということを知っていなければなりません。理念や宗教や文化によってではなく、ただ地理的にのみヨーロッパの境界を設定することが、ヨーロッパ史の客観的な比較分析への道を開くのです。

したがって、「私の」ヨーロッパには、中世の初期および後期にイスラーム教徒が自身の国家を築いていたような大陸の西南および東南の地域がつねに含まれています。つ

まり、中世のヨーロッパとは、西洋キリスト教圏のラテン語の世界と同一のものではなく、東欧のギリシア正教圏や各地に点在するユダヤ教徒共同体に加えて、イスラームの共同体のヨーロッパ部分をも包含するものだったのである。この認識には、二〇〇二年にヨーロッパの中世盛期についての体系的な比較研究をおこなったことではじめて至ることができました。つまり、ヨーロッパの結束性とその諸々の文化間の相異を正当に評価することが重要になったのであり、そして全てのことごとくわけそれぞれの宗教的な基盤についての問いへと通じていったのでした。その際とくに興味を引かれたのは、共通した一神教信仰が三つの宗教の信者にとって意思疎通の基盤となっていただけでなく、排他的な教義が固定化したり儀式実践が相互に異なったりすること、絶え間ない争いを生んでもいたということでした。私の着想では、ヨーロッパの歴史は、この意見の一致と衝突、合意と対立という緊張関係から、その独特のダイナミズムをともなって展開し、表出したのです。だから、ズイードラー出版がその四巻本のヨーロッパ史叢書の中世に関する巻を私に書くように持ちかけてきた時、私はよるこんでそれに飛びついたので。二冊目となるこの私のヨーロッパ史のモノグラフィは、今度は三〇〇年から一四〇〇年までを対象とし、中世をキリスト教に限らない

一神教によって特徴づけられた時代として把握することを試みるものでした。²³⁾

二〇〇六年に『キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラーム教徒』と題したこの著作を上梓した時、多宗教という見方に基づいた私の叙述への関心や、それどころか賛同の声に驚かされました。ヨーロッパと西洋を同一視する拙速な見方に対する私の異議申し立ては根拠のあるもので、一枚岩のキリスト教中世というイメージに対して、その時代の多様性を正しくも認めさせたと評されたのです。何人かの評論家はそれどころか、この本が現代のイスラーム教とキリスト教、ユダヤ教のあいだの接触と衝突^{コンフリクト}への関心にみごとに応えるものだ、いつになく政治的な論評を行いました。ある批評家だけは根本的に異議を唱えました。ユダヤ教徒という構成要素は、「ヨーロッパの歴史の流れを決定づけるのに関与する」因子になるまでには「洗練されて」いなかっただろうというのです。「根底にある状況はむしろ、キリスト教の西洋とイスラームの東洋とが相対^{対峙}していたというものであり、イスラームの方はいずれにしても古代以降のヨーロッパの形成にまったく関与しなかったのだ」と。その後、他の著者たちの手による新しいヨーロッパ史の叙述が刊行されましたが、キリスト教とラテン語を特徴とするヨーロッパという伝統的な見方を固持する者が

いる一方で、私の新しい構想に連なる者もいました。²⁴⁾ どちらのアプローチも今日に至るまでお互いに交わることなく並行しており、議論は生じていません。我々の歴史像の未来は定まってははいないのです。

とはいえ、私自身はここ数年來、ヨーロッパ中世についての私の新しい解釈には、本質主義への望まれざる傾向が含まれているのではないかと認識を次第に持つようになりまし²⁵⁾た。この疑いは、伝統的なキリスト教中世という見方に対して提起した「一神教的」中世というテーゼについて向けられているものではありません。というのも、そこで意図されたのは、統一的ではなく、多宗教的なヨーロッパであり、それは絶え間ない適応と反発のプロセスのなかで文化的に華開いたということなのです。疑念の対象となったのは、むしろ、ヨーロッパにおけるキリスト教徒とイスラーム教徒の広まりが広範囲において地理的にマージング可能だったことから、キリスト教的中核地域とイスラーム教的な周辺地域という話になってしまったことでした。そうではなく、新しい文^{カルトウリーグ}化^{ライオンシヤフト}研究によっても要求されているように、地域や場所によってさまざまである文化の混ざり具合や混^{ヘン}成^ド化の研究が重要視されるべきでした。²⁶⁾ さらに、議論の余地のない認識としては、三つの一神教は、地理的にどのようにも定義さえ得るヨーロッパ

だけでなく、同様に北アフリカやインダス川に至るまでの西南アジアをも特徴づけてきたということがありました。したがって、ヨーロッパに対する三つの一神教の特別な関与というものは、大陸間の比較を行ってはいじめて確かなものになるのでしょうか。それから私は、試みに世界の一神教地帯という言い方をしてみました。それはヨーロッパをはるかに越えて、大西洋からインダス川にまで及んだものです。他方、見誤ってはならないのは、中世ヨーロッパには一神教を奉じるユダヤ教徒やキリスト教とイスラーム教徒のほかに、多神教信者や二元論者、そしておそらくは無神論者もいたということです。結局のところ、文化を宗教と同一視したり、文化を宗教に由来するものだとしたりするのは、おそらく単純にすぎるので^④。

中世ヨーロッパの比較史におけるこうした諸々の問題は、グローバルヒストリーのコンセプトによって回避できません。その名称から想起されるころとは異なり、グローバルヒストリーはかならずしも世界全体の歴史であろうという人間が居住する限られた地域として捉えるならば、それは中世に関しても研究することが可能になります。比較ヨーロッパ史とは異なり、グローバルヒストリーでは、様々な民族や文化、宗教を持つ人々の関係と相互作用が重要と

なります。つまりグローバルヒストリーは、さまざまな文明について、それらを相互に比較して結びつけようとして問題のある定義付けを行わないのです。「大文明」を特定の地域に結びつけ、それが均一なものだったと主張することは、グローバルヒストリーでは疑わしいものとなります。比較史は大抵の研究者にとってすぐに荷の重いものとなりますが、グローバルヒストリーの関係史のアプローチは従来の歴史的思考を正當に評価するものであり、そのためグローバルヒストリーでは比較史よりも方法的に要求されることがはるかに少ないのです。グローバルヒストリーが成果を上げるのは、とりわけそれが地方や地域の文化の接触やその絡み合いをグローバルな文脈のなかで研究することを促すからです。したがって、グローバルヒストリーは歴史上のどの場所についても営むことが想定でき、それゆえ古い普遍史とは対照的に明らかに研究しやすいものなのです^⑤。

二〇一〇年にWBG出版の「グローバルヒストリー」叢書の一冊として刊行された本の中で、私はひとつのコミュニケーションション空間の歴史として三大陸からなる中世世界を描き出そうと試みました^⑥。しかし以下では、C・H・ベック出版の世界史叢書とハーヴァード大学出版局の執筆者の一人として獲得してきたいくつかの洞察をまとめておきま

しよう。そのための原稿はすでに三年前に提出済みですが、残念ながらミュンヘンにおいてもアメリカにおいても今のところまだ刊行されていません。私の原稿は、グローバルな文脈における西ヨーロッパの歴史に関するものですが、中世全体ではなく、六〇〇年から一三五〇年までのみを扱っています。

西暦六〇〇年ごろ、ヨーロッパは北半球の一部として大陸を横断する商業ネットワークと帝国構想のなかに取り込まれました。そのルーツは古代にありました。けれども一三五〇年までのあいだ、ヨーロッパのつながりは、南ではアフリカ・サハラ砂漠南縁のサヘル地帯を、東では中国を越えることはありませんでした。朝鮮半島や日本は、この時期にすべての島々に人が住むようになった太平洋全域とともに、ヨーロッパの認識外でした。大西洋も結びつけるよりも隔てる存在でした。風と海流が西側からのヨーロッパへの接触を阻みました。その一方、反対方向に向かつてはアイスランドと、一時的にはグリーンランドも船乗りと開拓者によってヨーロッパの一部となりました。しかし、ニューファンランドと——おそらく——「緑の島」における彼らとアメリカの先住民の接触はごく短期間のことにとどまり、何の影響も生じませんでした。つまり中世においてヨーロッパは、すでに古代にそうであったように、ア

ジアと（北）アフリカとともに、三大陸からなる人の居住地域の一部だったのです。ただ活動の空間だけが、水上から陸上へと大幅に移りました。世界はまだ、古代ローマ人が考えた通りに、地中海をぐるりと囲む以上のものではありませんでした。とはいえ、北海とバルト海は昔からの航路として、地中海には及ばないもののその重要性を保ち、増大させてさえいました。全体として、ヨーロッパは中世を通じて「大陸化」を経験しました。陸上を行く者には、海上を行く者よりも、その政治的・文化的形態を変化させるより大きなチャンスがあったのです。このことは少なくとも一四世紀の半ばまで当てはまりません。

この意味において、古代末期の人口移動にはとりわけ大きな重要性が認められます。それはドイツで「民族大移動」と呼ばれるもので、規模やまとまりには議論がありますが、ゲルマン人の諸集団がライン川とドナウ川においてリーメスを越えて、西ローマ帝国の領域にそれぞれ自分たちの国を建てました。多くの歴史家たちはこの出来事に「ヨーロッパの起源」を見ています。というのも、この民族大移動が国々の多様性を生み出すことになるのであり、それが絨毯のしみのように、後世の国民国家や、ヨーロッパの一体性のなかの多様性というものをすでにこの時点で示していたからです。このような歴史の理解に対する異議

は、当然のことながら、その国々の大部分が数世代を経ると軍事力に勝る隣国の犠牲となつて滅亡していき、政治的には後世のヨーロッパの秩序とはまったく関係し得ないという点にあります。これらの国々すべての問題は、それが純然たる移民によつて建てられ、支配されていたということでした。彼らにはるか遠くにある以前の居住地を完全に棄て、そこに戻ることはできませんでした。ごくささやかなマイノリティとして、彼らは多くの先住民の波間に消えてしまう怖れがありました。彼らが自己主張を行うことは、^{ドイツ}マイノリティ居住地域や共存社会を形成していくような厳格な境界線を設定するか、マジオリティと文化的に融和するかによつてのみ可能でした。しかしながら、この境界線の設定は長くは持続し得ませんでしたし、文化的な融和は結局のところ失敗に終わりました。

「民族大移動国家」の移民は、平和的な入植者か軍事的な征服者でした。しかし、彼らよりも後々まで続く影響力と、ヨーロッパの中世にとつて真に根本的な重要性があったのは、移民や侵略よりも拡大による人口の移動と国家形成でした。この移民や侵略よりも拡大によるという点が決定的な相異です。このことは、まずなによりもフランク人にあてはまります。彼らは下ゲルマニアのリーメス近郊に居た半ダースほどの小部族でしたが、まず三世紀半ばに

ローマ人によつてひとつのまとまりとして認識されました。このひとつの民族となりつつあった人々のもともとの集団が、遠方からクサンテン近郊のライン川右岸地域に移住してきたということを示す証拠はありません。故郷を棄てて見知らぬ土地に定住しようとしたヴァンダル人やブルグント人、ゴート人、ランゴバルド人とは異なり、フランク人は後代になつても移民になりませんでした。彼らは下ライン地域を棄てることなく、その居住・支配領域を少しずつ拡大したのです。移動した諸民族が持っていた、異郷の波間に消えてしまうという懸念を、フランク人が共有する必要はありませんでした。このことから、彼らは在地のローマ人たちと絶え間なく渡り合い、他のゲルマン人よりもはるかに開かれた態度をとりました。ゴート人やヴァンダル人などとは異なり、フランク人はとりわけ、その国の住民のマジオリティが信仰するキリスト教を受け入れられました。未知の刺激を受け入れ、新しい文化を築く類い希なる素質によつて、フランクの文化は単なる混成物^{ハイブリッド}以上のものになりました。彼らの国家形成と征服活動によつて、他の国々が獲得した文化もまた中世へと伝えられたことは明らかです。フランク王国がこのように西ヨーロッパの文化的多様性を決定的に促進したということは間違いないと思います。

ヨーロッパの大陸化は、七、八世紀以降、イスラームの軍隊が地中海地域における征服活動を進め、北アフリカだけでなく、スペインやシチリア島においてもイスラームの支配を打ち立てたことによって、決定的に規定されました。このことは、地中海商業や知識の伝達にも長いあいだ影響を残しました。同様に大きな意義があったのは、ムハンマドに直接続く四代の「正統カリフ」が、東方においてもまた成功を収めたということです。ササン朝・ペルシアを破滅させ、キリスト教ビザンツ帝国の領域から、後にはインダス川の南の谷まで及ぶ領域を征服したことで、イスラーム教徒は、「地中海とインド洋という二つの大きな経済的まとまりを結びつける中心的な位置を獲得」しました。³⁶ ティーグリス川・ユーフラテス川の流域とペルシア湾、ナイル川流域と紅海を統治下においたことで、イスラーム教徒は西の海（地中海）と東の海（インド洋）を結んで世界を横断する地帯を支配したのです。一一世紀に至るまで、陸海の重要な経済圏のなかでその支配を免れていたのは、ユーラシア大陸をまたぐシルクロードと商業の中心地であるコンスタンティノープルだけでした。とはいえ、地中海においては、キプロス島やクレタ島、アンティオキアを固守していたビザンツ帝国がこのイスラームの支配と争っていました。

アンダルシアとシチリア島、チュニジア、エジプトのあいだには、一〇世紀から一二世紀にかけて、イスラームの商業システムが存在していました。ペルシア湾岸のシーラーフやバスラ、そしてとりわけティグリス河畔のイスラーム国家の首都バグダードが、東方からの品々を輸入する港であり、それらの品々はそこからコンスタンティノープルへ、さらにはヨーロッパへと運ばれました。カイロからは、一一世紀末以降、ファーティマ朝がインド貿易へと乗り出しました。このため、いまや紅海を通るルートの方が、ティグリス川・ユーフラテス川流域とペルシア湾を通るルートよりも重要になりました。アレクサンドリアがキリスト教圏の商船団にとってもっとも重要な目的地となりました。インドや中国へ向かう通商路は、アラブとペルシアの商人や船乗りたちが独占していました。しかし、一〇〇〇年ごろにそれまでの生産者から買い手への直接納品制に代わって、大市場での取引が登場し、南アジア海岸地域を巡る商業ルートが大きく三つの部分に分けられると、とりわけインド人——彼らはしばしば自身もイスラーム教徒でした——や、さらにはヒンドゥー教徒やユダヤ教徒、またキリスト教徒さえもが、アラブ人やペルシア人に取り替わって代わりになりました。

中世においては、この遠隔地商業と同じようなことが、

學術交流においても行われていました。キープポジションを占めていたのは、西南アジアを支配していた人々、つまりとりわけイスラーム教徒でした。中世のこの数世紀にわたる知の潮流を見ると、それが東西二つに分かれていたことがすぐに分かるでしょう。アラブ・ペルシア地域から、一方では西側へアイルランドにいたるつながりが延びており、他方では東側へ中国や朝鮮半島、日本へといたるつながりがありました。その際、アラブ・ペルシア地域が東西のあいだをとりたてて言うほどの規模で仲介することはありませんでした。

一〇世紀、そしてとりわけ一一世紀以降、スペインとイタリアのキリスト教徒は、徐々にイスラーム教徒を地中海から排除していきます。キリスト教圏の拡大はレバント地方を巻き込み、当初はむしろビザンツ帝国の領域を侵犯しましたが、その後は十字軍による聖地回復運動によって決定的に促進されました。一二世紀初頭以降、ジェノヴァやピサ、ヴェネツィアの商人たちが、シリアとヨーロッパのあいだの交易を広範囲にわたって掌中に収めました。キリスト教徒が聖地で必要とするものすべて、イタリアの港を経由して配送されました。とりわけ一二〇四年の第四回十字軍に際して挙げた成果によって、イタリア商人はさらに黒海へと進出することができました。一二〇六年にヴェ

ネツィア人はクリミア半島のソルダイア〔現スタク〕に地歩を固め、またドン川河口のターナ〔現アゾフ〕にも定住しました。その一方で、ヴェネツィアの強力なライバルだったジェノヴァ人たちは、クリミア半島のカッファ〔現フェオドーシア〕に腰を据えました（一二六六年）。これらを拠点として、ヨーロッパの人々は、後代に中国の絹の交易にちなんで「シルクロード」と呼ばれるようになるアジア内部の大規模な東西の結びつきに接続することができたのです。チンギス・ハン（*Dschinghis Khan* 一二〇六一―一二七七）とその後継者たちによる帝国建設によって、西側ではバグダードを首都とするアッバース朝が征服され、東側では中国全土が支配されると、ヨーロッパ商人にとつてこのシルクロードはより安全なものとなり、関税もより軽いものになりました。

同時期に西地中海からイスラーム教徒が排除されていくと、イタリアの船乗りたちは大西洋にも惹きつけられていきました。ジェノヴァのガレー船は、一二七七年以降、定期的にイングランドやフランスへと航海しています。ピサの船は、フィレンツェの商品をマルセイユへと運び、さらにフランスにも運びました。ヴェネツィアの帆船は、一四世紀初頭以降、リスボンまで行っており、そこからさらにサンウィッチやサウサンプトン、ロンドン、あるいは

ブルツヘヤスロイス、ミデルブルフ、アントウエルペンへと航海していました。

一四世紀半ばごろ、アジアではシルクロードの「ヨーロッパ時代」が終わりました。モンゴルの分立したハン国間の抗争が解消不能なものとなり、ペストが流行し、遊牧民の大部分がイスラーム教に改宗し、中国では元王朝が漢民族の明に取って代われ、よそ者はどちらかと言えば拒絶されるようになったのです。遠隔地商業は、チンギス・ハン以前の時代のように、ここでふたたびイスラームの仲介者の手に握られることになりました。

一一世紀から一四世紀にかけての、地中海地域とさらに東方に向けたヨーロッパの商業の拡大について、歴史学はさまざまな解釈を行っています。マルク・ブロックの伝統を受け継いだフランスの中世史家たちは、それをヨーロッパの内側での諸々の動機に帰しています。つまり、人口増加や農業生産高の増大、分業化と專業化の進展、そして都市の急速な発展といったことによる「経済革命」があったというのです。しかし、いわゆる封建時代の第二期は、商業社会や都市社会を前にしての農業経済や農業社会の後退としても、自然経済から貨幣経済への移行としても解釈できないといえます。中世世界は、一〇五〇年以降も土地所有の世界のままであり、土地所有こそが全ての富と権力の

源泉であったというのです。ほぼ同時代に生じた社会と経済の変化は「精神的な再生」にもなわれたものであり、それは「我々がキリスト教徒の躍進と呼ぶ、包括的で、枝分かれした全体の一部を成すものだ」といいます。西ドイツの中世史研究でも同様に革命のメタファーが用いられ、中世盛期の「開進^{ウツフベリ}」という言い方がされました。そして、近代に至る道のりとして現代と結びつけられたり、あるいはそのダイナミズムの点で近代と比較されたりしました。マックス・ヴェーバーに依拠するなかで、この「開進」は、合理化に向かう西洋特有の傾向の兆しとして理解されたのです。一九六〇年代・七〇年代に生まれたそのような歴史の解釈は、今日ではほとんど説得力を持っていません。西洋的な近代が歴史の最終目的地であるということはもはやほとんど信じられておらず、代わりにさまざまな近代性へと至るたくさん^⑩の文化的なルートの正当性が認められているのです。

近年、別の解釈がジャネット・アブー・ルゴド (Janot Abu-Lughod) によって提唱されました。彼女は、一二五〇年から一三五〇年までの時代に北西ヨーロッパと中国を両極として広がっていた、商業と文化交流の世界システムを再構成しました。それによれば、それまで地域ごとに孤立して存在していた諸々の経済システムの歯車が、

その一〇〇年間に互いにかみ合ったのです。相互に結びついた輪からなる鎖がイメージされるでしょう。商人は、太平洋から黄海まで旅したのではなく、途中にある多くの中継地点で荷を積み替えて、その積み替えた荷をさらに売ったのです。そこでは三つの文化的地域——東アジア、アラビア、西ヨーロッパ——と、八つの経済的サブシステムが区別されています。ヨーロッパは、シャンパーニュの大都市やフランドルの都市ブルツヘとヘント、イタリアの港湾都市ジェノヴァとヴェネツィアに集約されるシステムによって議論に取り入れられています。そこでは、フランドルの毛織物とオリエントの奢侈品の交換、および貨幣流通が商業の中心になっていました。このヨーロッパのシステムは、一二世紀にヨーロッパ側の地中海圏と結びつきました。しかしながら、この中世の世界システムが、現代のグローバル化から考えられるような、すべての人と地域をひとつにまとめ上げるようなものだったとは考えてはならないといえます。それはむしろ、島のようにお互いに孤立して点状にする、多くの重要な都市からなるものでした。これらの中心地のあいだの交流は同様にほとんどなく、ネットワークの発展も脆弱なものでありませんでした。中世の世界システムは、一六世紀の近代世界システムと直接つながるものではありませんでした。そしてまさに中世盛期におい

て商業の世界規模でネットワーク化したことが、この中世のシステムの崩壊の原因にもなったのです。つまりその崩壊は主としてペストの流行によって引き起こされたのですが、そのペストはそれまで商品が行き来していたのと同じルートを辿って広まったのです。

アブー・イルゴドは、古い歴史叙述にみられるヨーロッパ中心主義を克服したと自負しています。しかし実際には、彼女はそのグローバルな視点からのアブローチにもかかわらず、このヨーロッパ中心主義に囚われつづけています。というのも、一一世紀のヨーロッパの経済的躍進に鍵となる重要性を求める見方は、すでにアンリ・ピレンヌ (Henri Pirenne) がヴェネツィア商業の北イタリアと、フリース人とスカンディナヴィアの諸部族が活動した低地地方の相互作用から導き出していたものだからです。その意味で、アブー・イルゴドもまた西洋キリスト教圏に土着の諸力があるという論証の仕方をしたことになりました。どちらの解釈においても、ヨーロッパの地中海商業の躍進にはイスラームの地中海システムが先行していたことと、そしてヨーロッパの地中海商業の躍進はけっしてイスラームのアジア交易を廃れさせるものではなかったということが考慮されなままになっています。たしかに西ヨーロッパの人々は、この時期、イスラーム教徒を完全に東方

へと押し戻し、地中海の制海権を握りました。しかしもちろんそれだけがすべてということではなかったのです。イスラームの国家や商人たちは、とりわけ聖地国家の崩壊とモンゴルの支配の衰退の後も、引き続き中央アジアと東アジアへのコンタクトにおいて重要な役割を果たしていました。十字軍遠征の時代が終わりを迎えた後は、もはやアンダルシア地方ではなく、アレクサンドリアが——今までも言われてきたように——「イスラームとキリスト教の商業圏のあいだの境界線上に位置する市場」でした。

中世盛期の終わり頃には、西ヨーロッパは以前よりもさらに大幅に内側へと後退していました。一三五〇年頃には、六〇〇年や八〇〇年、あるいはそれどころか一二〇〇年頃よりもずっと地方的だったのです。東方ではヨーロッパの拡大する力が衰え、西方ではグリーンランドという大西洋の前哨が失われました。一二六一年にグリーンランドをその王国の支配下に収めたノルウェーの人々は、一三六〇年ごろにグリーンランドの「西入植地」が「スクレーリング (skraelings)」によって破壊された時に、その住民を守ることができませんでした。この「スクレーリング」とはおそらく、一三七九年にグリーンランドのより大規模な「東入植地」をも襲撃したイヌイット(カラーリト)のことだったようです。その襲撃では一八名の成人男性が殺され、数

名の若者が奴隷にされました。同時期には、欠かすことのできないはずのノルウェーからの商船が現れなくなり、一四一〇年にヨーロッパへ戻った船が最後になりました。しかし、ヴァイキングの没落に決定的だったのは、この敵対的なイヌイットたちよりも、島の自然資源に関する入植者たちの失策であったようです。

ヨーロッパの内側への閉じこもりは、とりわけ政治史に見て取ることができます。一四世紀において、各王朝は落ち着きのなさにあふれており、征服活動、つまり暴力によって、あるいは協約の締結によって、その支配の範囲を広げようとしていました。盛期中世にその予兆が見られた、大陸における国民国家的な区分けの輪郭はこの時期に消え去り、ようやく近代なつてそれまでよりもはっきりした形で姿を現すこととなります。教会と西ヨーロッパの諸王朝において中心的な構造が構築されてゆくと、あらゆる種類のマイノリティたちが次第にその犠牲となりました。一三五〇年頃のヨーロッパは、それまでよりもはっきりとキリスト教的だったのです。

では、中世盛期にヨーロッパの西側を特徴づけていたグローバルなもの、一四世紀にすべて失われてしまったのでしょうか。おそらく信じたくはないでしょうが、このことを覆す論拠を見つけるのは極めて難しいのです。一五世

中世ヨーロッパ史とグローバルヒストリー（ボルゴルテ）

紀末にアフリカをぐるりと廻ってインドへと至る航路が開かれたことではじめて、西ヨーロッパの人々は狭くなりすぎた古代・中世的な地中海世界から自由になることができたのです。

- (一) Michael Borgolte, *Europa entdeckt seine Vielfalt. 1050–1250*, (Handbuch der Geschichte Europas, Bd. 3), Stuttgart, 2002; Ders., *Christen, Juden, Muselmanen. Die Erben der Antike und der Aufstieg des Abendlandes 300 bis 1400 n. Chr.*, (Stiedler Geschichte Europas), München, 2006.
- (二) Schwerpunktprogramm 1173 der Deutschen Forschungsgemeinschaft „Integration und Desintegration der Kulturen im europäischen Mittelalter“, Laufzeit 2005–2011. 以下の論集を参照。Michael Borgolte, Juliane Schiel, Bernd Schneidmüller und Annette Seitz (Hrsg.), *Mittelalter im Labor. Die Medävistik testet Wege zu einer transkulturellen Europawissenschaft*, (Europa im Mittelalter. Abhandlungen und Beiträge zur historischen Komparatistik, Bd. 10), Berlin, 2008; Margit Mersch und Ulrike Ritzefeld (Hrsg.), *Lateinisch-griechisch-arabische Begegnungen. Kulturelle Diversität im Mittelmeerraum des Spätmittelalters*, (Europa im Mittelalter, Bd. 15), Berlin, 2009; Michael Borgolte und Bernd Schneidmüller (Hrsg.), *Hybride Kulturen im mittelalterlichen Europa. Vorträge und Workshops einer internationalen Frühlingsschule. Hybrid Cultures in Medieval Europe. Papers and Workshops of an International Spring School*, (Europa im Mittelalter, Bd. 16), Berlin, 2010; Michael Borgolte, Julia Dücker, Marcel Müllerburg und Bernd Schneidmüller (Hrsg.), *Integration und Desintegration*

der Kulturen im europäischen Mittelalter, (Europa im Mittelalter, Bd. 18), Berlin, 2011; Michael Borgolte, Julia Dücker, Marcel Müllerburg, Paul Predatsch und Bernd Schneidmüller (Hrsg.), *Europa im Geflecht der Welt. Mittelalterliche Migrationen in globalen Bezügen*, (Europa im Mittelalter, Bd. 20), Berlin, 2012. 以下を参照。Thomas Foerster, *Vergleich und Identität. Selbst- und Fremdentwertung im Norden des hochmittelalterlichen Europa*, (Europa im Mittelalter, Bd. 14), Berlin, 2009; Juliane Schiel, *Mongolensturm und Fall Konstantinopels. Dominikanische Erzählungen im diachronen Vergleich*, (Europa im Mittelalter, Bd. 19), Berlin, 2011.

- (三) 以下を参照。Michael Borgolte, “Über europäische und globale Geschichte des Mittelalters. Historiographie im Zeichen kognitiver Entgrenzung,” in Klaus Ridder und Steffen Patzold (Hrsg.), *Die Aktualität der Vormoderne. Epochenuntwürfe zwischen Alterität und Kontinuität*, (Europa im Mittelalter, Bd. 23), Berlin, 2013, S. 47–65; Ders., “Mittelalter in der größeren Welt. Mediävistik als globale Geschichte,” in Ders., *Mittelalter in der größeren Welt. Essays zur Geschichtsschreibung und Beiträge zur Forschung*, (Hrsg.) von Tillmann Lohse und Benjamin Scheller, (Europa im Mittelalter, Bd. 24), Berlin, 2014, S. 533–546; ND in Michael Wildt (Hrsg.), *Geschichte denken. Perspektiven auf die Geschichtsschreibung heute*, Göttingen, 2014, S. 52–68.
- (四) 以下を参照。Sebastian Conrad, *Globalgeschichte. Eine*

Einführung: München, 2013; Jürgen Osterhammel, *Die Verwandlung der Welt. Eine Geschichte des 19. Jahrhunderts*, München, 2009; Ders. (Hrsg.), *Weltgeschichte*, (Basistexte Geschichte, Bd. 4), Stuttgart, 2008.

- (㉞) Advanced Grant des ERC im Zuge des Siebten Forschungsrahmenprogramms (FRP 2007–2013) für “Foundations in Medieval Societies: Cross-cultural Comparisons,” 2012–2017. ヨーロッパ中世史研究プロジェクト Michael Borgolte (Hrsg.), *Enzyklopädie des Stiftungswesens in mittelalterlichen Gesellschaften. Bd. 1: Grundlagen*, Berlin, 2014; *Bd. 2: Das soziale System Stiftungen*, Berlin, 2015; Ders., “Foundations in Medieval Societies. Cross-cultural Comparisons. A Project of the European Research Council at the Humboldt University of Berlin,” *Journal of Transcultural Medieval Studies*, 1 (2014), S. 161–166; Ders., “Foundations for the Salvation of the Soul – an Exception in World History?,” *Medieval Worlds*, 1 (2015), S. 86–105; Ders., “Wie Weltgeschichte erforscht werden kann. Ein Projekt zum interkulturellen Vergleich im mittelalterlichen Jahrtausend,” *Zeitschrift für Historische Forschung*, 43-1 (2016), S. 1-25.

(㉟) Michael Borgolte, “Kommunikation – Handel, Kunst und Wissenstausch,” in Johannes Fried und Ernst-Dieter Hehl (Hrsg.), *Weltdeutungen und Weltreligionen, 600 bis 1500*, (WBG Weltgeschichte. Eine Globalgeschichte von den Anfängen bis ins 21. Jahrhundert, Bd. 3),

Darmstadt, 2010, S. 17–56, Lit.: 469 f.; ND in Ders., *Mittelalter in der größeren Welt* (wie Anm. 3), S. 493–532; Ders., “Zwischen zwei Katastrophen. Europas Westen von 600 bis 1350,” in Cemal Kafadar (Hrsg.), *Agrarische und nomadische Herausforderungen*, (Geschichte der Welt, Bd. 2), im Druck (Ms. von Oktober 2012).

- (㊱) オーストリア Michael Borgolte, “Vor dem Ende der Nationalgeschichten? Chancen und Hindernisse für eine Geschichte Europas im Mittelalter,” *Historische Zeitschrift*, 272 (2001), S. 561–596; ND in Ders., *Mittelalter in der größeren Welt* (wie Anm. 3), S. 31–59, hier 53.

(㊲) Michael Mitterauer, *Warum Europa? Mittelalterliche Grundlagen eines Sonderwegs*, München, 2003. ヨーロッパ史 ヨーロッパ史 Johannes Fried, “Reis statt Roggen. Michael Mitteraues Europa-Buch reißt Perspektiven auf,” *Frankfurter Allgemeine Zeitung*, vom 30.6.2013. ヨーロッパ史 Michael Borgolte, “Europas Gretchenfrage. Michael Mitterauer über den Aufstieg des Okzidents,” *Süddeutsche Zeitung*, vom 27.10.2013, S. 16; Ludolf Kuchenbuch, “Kontrastierter Okzident. Bemerkungen zu Michael Mitteraues Buch “Warum Europa? Mittelalterliche Grundlagen eines Sonderwegs”,” *Historische Anthropologie*, 14 (2006), S. 410–429.

(㊳) オーストリア Michael Borgolte, “Europäische Geschichten. Modelle und Aufgaben vergleichender Historiographie,” in Marc Löwenher (Hrsg.), *Die “Blüte”*

der Staaten des östlichen Europa im 14. Jahrhundert, Wiesbaden, 2004, S. 303–328, hier: 324–326.

- (10) 大下和彦監修。Michael Borgolte (Hrsg.), *Das europäische Mittelalter in Spannungsbogen des Vergleichs. Zwanzig internationale Beiträge zu Praxis, Problemen und Perspektiven der historischen Komparatistik*, (Europa im Mittelalter. Abhandlungen und Beiträge zur historischen Komparatistik, Bd. 1), Berlin, 2001. 1) 〇 編輯 大下和彦 110110年 大下和彦 監修 大下和彦 監修 大下和彦 監修

(11) Ebd., S. 311–316.

(12) Ebd., S. 316f.

- (13) 大下和彦監修。Wolfgang Schuller, *Das Erste Europa. 1000 v. Chr. – 500 n. Chr.*, (Handbuch der Geschichte Europas, Bd. 1), Stuttgart, 2004; Hans-Werner Goetz, *Europa im frühen Mittelalter. 500–1050*, (Handbuch, Bd. 2), Stuttgart, 2003; Michael North, *Europa expandiert. 1250–1500*, (Handbuch, Bd. 4), Stuttgart, 2007; Günter Vogler, *Europas Aufbruch in die Neuzeit. 1500–1650*, (Handbuch, Bd. 5), Stuttgart, 2003; Heinz Duchhardt, *Europa am Vorabend der Moderne. 1650–1800*, (Handbuch, Bd. 6), Stuttgart, 2003; Wolfgang von Hippel, *Europa zwischen Reform und Revolution. 1800–1850*, (Handbuch, Bd. 7), Stuttgart, 2012; Jörg Fisch, *Europa zwischen Wachstum und Gleichheit. 1850–1914*, (Handbuch, Bd. 8), Stuttgart, 2002; Walthar L. Bernecker, *Europa zwischen den Weltkriegen. 1914–1945*, (Handbuch, Bd. 9), Stuttgart, 2002. 第二次世界大戦後 〇

時代について予定されていた第一〇巻は刊行されていない。

- (14) Borgolte, *Europa entdeckt seine Vielfalt* (wie Anm. 1), S. 24–220: “Die europäischen Monarchien: Eine Erfolgsgeschichte mit Widersprüchen.” Darin 2.1.2: “Angemaßte Hegemonie: Die Römische Kirche”.
- (15) Ebd., S. 27–75.
- (16) Ebd., S. 27.
- (17) Ebd., S. 28.
- (18) Ebd., S. 28.
- (19) Ebd., S. 95–115.
- (20) Ebd., S. 116.
- (21) Ebd., S. 142.
- (22) Ebd., S. 167–185.
- (23) Ebd., S. 185–210.
- (24) Ebd., S. 211–221.
- (25) Bernd Schneidmüller, “Die mittelalterlichen Konstruktionen Europas. Konvergenz und Differenzierung.” in Heinz Duchhardt und Andreas Kunz (Hrsg.), “*Europäische Geschichte als historiographisches Problem*, (Veröffentlichungen des Instituts für Europäische Geschichte Mainz. Abteilung Universalgeschichte, Beiheft 42), Mainz, 1997, S. 5–24, hier 6–16; Michael Borgolte, “Zwischen Erfindung und Kanon. Zur Konstruktion der Fakten im europäischen Hochmittelalter.” in Andreas Bührer und Elisabeth Stein (Hrsg.), *Nova de veteribus. Mittel- und neulateinische Studien für Paul Gerhard Schmidt*, Leipzig, 2004, S.

- 292–325, ND in Ders., *Mittelalter in der größeren Welt* (wie Anm. 3), S. 79–112, 111頁と82–85. 巻末のオスナムナ Klaus Osekema, *Bilder von Europa im Mittelalter*, (Mittelalter-Forschungen, Bd. 43), Ostfildern, 2013.
- (26) オスナムナ Borgele, “Über europäische und globale Geschichte” (wie Anm. 3), S. 59.
- (27) オスナムナ Borgele, “Wie Europa seine Vielfalt fand. Über die mittelalterlichen Wurzeln für die Pluralität der Werte,” in Hans Joas und Klaus Wiegandt (Hrsg.), *Die kulturellen Werte Europas*, Frankfurt am Main, 2005, S. 117–163; Ders., “Juden, Christen und Muslime im Mittelalter,” in Ludger Honnefelder (Hrsg.), *Albertus Magnus und der Ursprung der Universitätsidee. Die Begegnung der Wissenschaftskulturen im 13. Jahrhundert und die Entdeckung des Konzepts der Bildung durch Wissenschaft*, Berlin, 2011, S. 27–48, 423–437, ND in Ders., *Mittelalter in der größeren Welt* (wie Anm. 3), S. 401–424.
- (28) オスナムナ Borgele, “Ein einziger Gott für Europa. Was die Ankunft von Judentum, Christentum und Islam für Europas Geschichte bedeutete,” in Winfried Eberhard und Christian Lübke (Hrsg.), *Die Vielfalt Europas. Identitäten und Räume. Beiträge zu einer internationalen Konferenz 6. bis 9. Juni 2007*, Leipzig, 2009, S. 581–590.
- (29) Borgele, *Christen, Juden, Muselmanen* (wie Anm. 1).
- (30) 以下の記述は次の文献による。Michael Borgele, “Über den Tag hinaus. Was nach dem Schwerpunktprogramm kommen könnte,” in Ders. und Schneidermüller (Hrsg.), *Hybride Kulturen* (wie Anm. 2), S. 309–328, 111頁と311–314, mit Lit.zitaten.
- (31) オスナムナ Boshof, *Europa im 12. Jahrhundert. Auf dem Weg in die Moderne*, Stuttgart, 2007; Verena Postel, *Die Ursprünge Europas. Migration und Integration im frühen Mittelalter*, Stuttgart, 2004. 巻末のオスナムナ Reinhold Kaiser, *Die Mittelmeerwelt und Europa in Spätantike und Frühmittelalter*. (Neue Fischer Weltgeschichte), Frankfurt am Main, 2014. オスナムナ Rudolf Schieffer, *Christianisierung und Reichsbildungen. Europa 700–1200*, (C. H. Beck Geschichte Europas), München, 2013. オスナムナ Bernd Schneidermüller, *Grenzfahrung und monarchische Ordnung. Europa 1200–1500*, (C. H. Beck Geschichte Europas), München, 2011.
- (32) オスナムナ Borgele, “Über den Tag hinaus” (wie Anm. 30), 401頁と417頁。Almut Höfert, *Kaiserium und Kalifat. Der imperiale Montheismus im Früh- und Hochmittelalter*, (Reihe “Globalgeschichte,” Bd. 21), Frankfurt-New York, 2015.
- (33) Michael Borgele, “Migrationen als transkulturelle Verflechtungen im mittelalterlichen Europa. Ein neuer Pfug für alte Forschungsfelder,” *Historische Zeitschrift*, 289 (2009), S. 261–285, ND in Ders., *Mittelalter in der größeren Welt* (wie Anm. 3), S. 425–444.

- (34) この部分と以下に続く箇所は、Borgolte, *Mittelalter in der größeren Welt* (wie Anm. 3), S. 536 f. に於て。
- (35) 最新のこのことについてはを参照。Borgolte, “Wie Weltgeschichte erforscht werden kann” (wie Anm. 5).
- (36) Borgolte, “Kommunikation” (wie Anm. 6).
- (37) Borgolte, “Zwischen zwei Katastrophen” (wie Anm. 6).
- (38) André Wink, *Al-Hind. The Making of the Indo-Islamic World, Vol. 1: Early Medieval India and the Expansion of Islam, 7th–11th Centuries*, Boston-London, 2002, S. 10.
- (39) Jacques Le Goff, *Das Hochmittelalter*, (Fischer Weltgeschichte, Bd. 11), Frankfurt am Main, 1965, S. 16. 以下を参照。Borgolte, *Europa entdeckt seine Vielfalt* (wie Anm. 1), S. 337–357, hier 343.
- (40) 以下を参照。Michael Borgolte, “Einheit, Reform, Revolution. Das Hochmittelalter im Urteil der Modernen,” *Göttingische Gelehrte Anzeigen*, 248, Heft 3/4 (1996), S. 225–258, hier 246 f.
- (41) 数多くの文献のなかで代表的なのは、Shmuel N. Eisenstadt (ed.), *Multiple Modernities*, New Brunswick-London 2005; Michael Borgolte, “Wie Europa seine Vielfalt fand. Über die mittelalterlichen Wurzeln für die Pluralität der Werte,” in Hans Joas und Klaus Wiegandt (Hrsg.), *Die kulturellen Werte Europas*, Frankfurt am Main, 2005, S. 117–163.
- (42) Janet L. Abu-Lughod, *Before European Hegemony: The World System A. D. 1250–1350*, New York-Oxford 1989, NID 1991 (シヤネット・ロープー＝ルゴド〔佐藤次高ほか

- 訳〕『ヨーロッパの覇権以前』上六、岩波書店（二〇〇一年）。
- (43) Henri Pirenne, *Mahomet und Karl der Große. Untergang der Antike am Mittelmeer und Aufstieg des germanischen Mittelalters*, Frankfurt am Main-Hamburg, 1963, S. 206 [zuerst 1937] (ブハリ・ジュンヌ〔中村宏ほか訳〕『ヨーロッパ世界の誕生』創文社（一九六〇年三四三頁））。

- (44) Olivia Remie Constable, *Trade and Traders in Muslim Spain. The Commercial Realignment of the Iberian Peninsula, 900–1500*, Cambridge, 1994, NID 1996, S. 241. (シムリン・フンボルト大学名誉教授)